

【解説】ドイツ・フランスの初期絵はがき展



1. ドイツの郵便配達人を描いたドイツの「持ち絵はがき」(1910年ごろ)。

絵はがきの中に小さな写真が仕込んである。ドイツ各地用に作られたらしく、郵便物の地名は絵はがきによって異なる。

2. 1910年代のスイス製絵はがき。アルプスの山々とレマン湖、トゥーン湖、ノイシャテル湖、ルツェルン湖などが描かれている。

19世紀後半に観光登山ブームを迎えたスイスにとって、絵はがきは格好の宣伝メディアだった。人々は山頂にたどりつくまでと争うように絵はがきを買い、土地の名前の消印のついた絵はがきを投函した。家族に宛てた絵はがきを、あとで自身の絵はがき帖に収めることもしばしば行われた。

なお、展示の連なりは藤本由紀夫氏による幻想のスイスで、同じ山、同じ湖が何度も重複して現れる。

3. アメリカ初の官製絵はがきシリーズ、1893年シカゴ万博記念絵はがき。

当時としては最先端の多色石版印刷(クロモリトグラフ)が用いられている。

使用済みの絵はがきに描かれているのは、湖岸に停泊していた戦艦イリノイの模型。文面には「これは万博のみやげ絵はがきだから取っておきなさい」とある。おそらく、その「取っておいた」絵はがきが古絵はがき屋に流れたのだろう。



コロンブス上陸300年を記念したシカゴ万博では、ミシガン湖畔に当時の万博史上最大規模の巨大建築が立ち並んだ。「電気館」では、中では最新式の電気エレベーターや電飾が展示された。

4. 19世紀末、ドイツ語圏の観光絵はがき。

この頃のドイツ語圏の観光絵はがきには「Gruss aus ...」(「...からこんにちは」の意味)と書いてあることが多い。そのため「グリュス・アウス」とも呼ばれる。多色石版を用いた「グリュス・アウス」式の観光絵はがきは1893年ごろから発行され始めた。

1900年ごろには流行はピークとなり、鉄道の各駅に絵はがき売りが立ち、土地の名所を描いた絵はがきを売り歩いた。劇場やホテルやカフェなどでも、宣伝

用に独自の絵はがきが発行された。多色石版印刷の技術を示すべく、画面は細かく分割され、いかに細密な絵を印刷できるかがアピールされている。

パサーージュの光景が描かれた絵はがきは珍しい。ヴァルター・ベンヤミンの幼年時代、ベルリンはこのような場所であったのだろう。

5. ラファエル・キルヒナー絵はがき。

ラファエル・キルヒナー(1875-1917)は19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したイラストレーターで、大量の絵はがきイラストを描いた。ウィーン出身のキルヒナーは、1900年までは主に市民生活を描いた絵はがきなどを出していたが、次第にエキゾチックな衣装を身に纏った女性のイラストで人気を博し、ウィーンだけでなく、フランス、イギリス、ドイツなど各国の絵はがき会社からオリジナル絵はがきを出版するようになった。

サン・トイ(1900年)、ミカド(1900年)、ゲイシャ(1900年)絵はがきは、彼の初期の代表作(ウィーン製)で、いずれもイギリスのコミック・オペラからインスピレーションを得たもの。サン・トイとゲイシャはシドニー・ジョーンズの作品で前者は北京が舞台なのだが、なぜか日本ものと誤解されることが多い。ミカドはギルバート&サリバンの代表作(1887年)で、現在でも上演されることが多い。ちなみに、キルヒナーの描く着物姿の女性はなぜか胸元が開いて、帯が胸の位置にある。

当時流行しつつあった海水浴ブームを反映して、海辺の女性を描いた絵はがきも多いが、そうした場面でも、キルヒナーの描く女性の衣装はエキゾチックである。

卵をはさんだ二人の女性のイースター絵はがき(1902年)はドイツ製。卵はキルヒナーの好んだテーマである。



その後しばらくのブランクを置いて、1910年頃から、キルヒナーの絵は、より官能的なタッチへと変化する。「ラ・ヴィ・パリジェンヌ」を始め数々の雑誌に掲載された女性像は「キルヒナー・ガール」と呼ばれ、やがて第一次世界大戦(1914-)が始まると、前線の兵士たちの人気を集めるようになり、背囊に入れられ、兵舎の壁に飾られた。イギリス国旗を掲げた卵からストッキングの脚がはみ出すというエロティックなイラスト(ロンドン製 1916年)はこの頃のものである。オーストリア出身のキルヒナーにとって、イギリスとオーストリアの戦争をイギリスの側から描くことは、屈折した感情をもたらしたに違いない。

あるいは大陸の戦争を疎んじたのか、キルヒナーは1915年にアメリカに渡り、ブロードウェイ・ミュージカルの創始者でもあるジークフリートの「ジークフリート・フォーリーズ」で美術監督に就任するが、1917年8月に虫垂炎がもとで急逝。彼のスタイルは、ヴァルガなどのちのピンナップ・ガール画家に大きな影響を与えた。

6. ピンポン絵はがき

1901年から04年にかけて、イギリスには空前のピンポンブームが訪れた。新素材のセルロイドを用いたピンポン玉によって、屋内で手軽にテーブル「テニス」ができたのがその原因だった。当時、ロンドン市内では午前中に投函したはがきが午後には先方に届いた。この最先端の通信手段を用いて、人々は友人にピンポン招待絵はがきを出し、家の中でピンポンに興じた。強いサーブはテーブルからそれて飼い猫を襲った。イギリスではピンポン招待用の専用絵はがきが発行されたほか、ブームを風刺する絵はがきも多数発行された。



7. 昭和十年ごろの大阪絵はがき

昭和十年ごろに発行された「大阪の名所」絵はがきを見ながら、workroom近辺の昭和十年に思いを馳せてみよう。

まずworkroomを出て北浜方面に行く。大きな交差点の斜め向かいにあるのが、昭和十年(1935)に落成した大阪株式取引所。ちなみにここは数年前に改築後、ほぼ同じ姿が再建されたので見てみると、街には縦横に市電が通っていた。

難波橋を過ぎてしばらく歩くと天神橋。対岸を見ると、天満宮とその周囲の森が見える。昭和初期の大阪がいか

低層だったが分かる。

今度はworkroomから淀屋橋方面に向かってみよう。昭和八年に開通した大阪地下鉄淀屋橋駅。まだ駅の看板が簡素だが、壁や天井のデザインには一部、現在でも同じものが残っている。もしあとで淀屋橋駅に降りられたなら確認されたし。この頃には地下鉄工事で掘り起こされた地面は埋め立てられ、舗装された御堂筋が姿を現していただろう。



さて、次はworkroomのカフェから対岸を眺めてみよう。中之島公会堂が見える。写真のアングルからすると、このビルか隣のビルあたりから撮影されたものと思われる。カフェの窓から確認すると、立木や前庭など現在との違いがよく分かる。背後のビルの並びが違うことにも注目しよう。

さらに、カフェの窓から見える橋に注目。この橋から撮影されたと思われるのが、堂島川の絵はがき。左手に市役所の裏側が写り込んでいる。おそらく、写真の左手前には中之島公会堂があるはずだ。

8. 神戸絵はがき

居留地でもあった神戸の風景は古くから絵はがきに用いられ、海外に送られることも多かった。摩耶山、諏訪山は当時から手軽な行楽地としてしばしば明治期の絵はがきに写り込んでいる。

郊外の舞子の浜は、ヨットではなく和船が行き来するひなびた漁港であった。



新開地は活動写真で賑わっており、ほうぼうにノボリが立っていた。幼少時代の淀川長治氏が楽しんだ光景であろう。

時代は変わって昭和初期、ハイカラなすずらん型の街灯が立ち並ぶ元町通り。通りの向こうに大丸が小さく写り込んでいる。手前左手、澤谷文房具店は現在も元町一丁目で営業している。

諏訪山に登ると、神戸の街が一眸できた。低層の神戸の街の真ん中を、煙を立てて省線列車が走っている。

9. ダイカット透かし絵はがき

通信面と絵の面との間に薄いクリーム色の紙がはさみこまれている。絵の面に切り込みがあり、光に透かすと月や街灯が淡い色にともる。当時は長時間露光やフラッシュの技術が発達していなかったため、夜の写真というものが存在しなかった。透かし絵はがきは、昼の光景から夜の光景を作り出す魔術でもあった。ベルリン、ヴォルフ・ハーゲルベルク社製。

10. トランスペアレncy透かし絵はがき

上:透かしの入った聖霊降臨祭絵はがき。1899年5月12日 ドイツ、ロートリンゲン(ロレーヌ)宛。

下:日本製の透かし絵はがき。「清盛、怪異を見る」の図。光に透かすと庭に保元の乱の亡霊が現れる。

「トランスペアレncy」タイプの絵はがきには、通信面と絵の面との間に着色した薄い紙をはさみこんである。一見するとただの絵はがきだが、光に透かすと表面からは見えない別の絵が浮かび上がる。このタイプの絵はがき技術は日本にも輸入され、「透き影絵はがき」という名で売り出された。

11. ユーゲントシュティル/アール・ヌーボー調絵はがき

ドイツ、ドレスデン製。蒔絵風絵はがき。19世紀末に輸入された日本の浮世絵や事物は、アール・ヌーボーやユーゲント・シュティルといったヨーロッパの視覚文化に大きな影響を及ぼした。これらの絵はがきもそうした時代のものだが、角を丸くしてあるところが珍しい。差出人がツバメのくちばしに封筒を描き加えている。1901年消印。

12. 「ここにいます」絵はがき

差出人は、つい、自分の居場所を絵はがきに書き込んでしまう。

その文字と矢印から、受取人は絵はがきの中に入り込む。

(@workroom July 2006.
解説: 細馬宏通)